

《教材解釈とところどころ》

テスト的 思考法

磯 貝 英 夫

文学教育といったことを考える場合、いま一番必要なことは、テスト的発想法から、教師自身が脱出することではないかと思う。

テスト作りは、好むと好まざるにかかわらず、教師に課せられた重要な職務で、それに注がれる大きなエネルギーに敬意を表しこそすれ、非議することはなにもない。けれども、こわいもので、常時それに心を勞している、すべてのものの考え方、発想のしかたが、テスト型にはまってしまうと、ありそうに思われる。客観的で、簡明な一つの答——テストがそれをねらうのは当然であるが、全体に、そういう答の可能な範囲に、思考そのものが局限されるといふ傾向があるように感じられるのである。

だが、これは、特に文学に関しては、たいへんこまったことなのである。

教育研究の場に臨んだりすると、よく、「この作品のテーマは何ですか。」という問にぶつかると、そういうときの質問者のまなざしは、たいてい真剣そのもので、しかも、ほとんどの場合、一語もしくは一文の答を要請せられているのである。私は、いつも閉口して、「それについて話すとなると、四時間位はかかるので……。」というようなことを言っていて、あきれられてしまうのであるが、これは、事実そのとおりなのだからしかたがない。

いったいに、作品の主旨を一文で要約するといったことは、むずかしいというより、ほとんど意味がない。そんな要約でかたづかないからこそ、作者は作品を書いているとも言えるのであって、われわれは、作品にしたがって、作者とともに徹底的に考えぬき、さらに、作品をこえて考えつづける以外には、どんな解説のしかたもないのである。その考えがどこまで深まり、どこまでひろがるかが問題なので、要約的な終点などというものはどこにもない。作品解釈には、すばらしい解釈というものはあるが、正しい解釈というものは、ない、というのが、私の頑固な考えである。こんな言いかたを納得してもらうためには、多分、よほどの補足が必要であろうが、いまはそれにはふれない。ただ、「テーマを一言で言え。」といった設問は、すばらしい解釈をひきだすことにまったく役立たないばかりか、逆に、それを封殺してしまうおそれがあることに、注意を喚起したいのである。

考えてみれば、こういう設問はきわめて教室くさいもので、詮ずるところ、テスト的発想法にほかならぬと言っておよいだろう。AかBかという思考枠をあらかじめ決めておいて、どちらかといえばAだという判断をさせることが、テストとして成立しないわけでは決してない。しかし、問題を主体的に燃焼させる文学的思考は、あく

まで、そのさきにあるのである。こう言うと、「文学は自分にはどうも……」と言う人がたくさん出てきそうに思われるが、ここで、その特殊枠を外して、もうすこし言いたい。

一般に、読解研究というと、要約整理法のことだといいたい相場がきまっているらしく、主文だとか、キー・ワードだとか、何とか構図だとか、まことにぎやかなことである。なかには、図を書くにしたがってだんだんわからなくなるといようなものもあるが、とにかく、そういう風の発表を聞きながら、私は時々索然とした気持ちになる。あれは、結局、原文をだんだん貧しくしてゆく操作にすぎないじゃないか、そういう風にして、最後に、骨の骨みたいなものをつかむことがはたして読解なのか、という気がしてくるのである。そういう方法に熟練した教師がすばらしい国語教師であるかという、どうも私の経験は、首をたてにふらないのである。

事はまったく逆であって、一つの文から、思いがけない五の意味が、十の問題がつき出されてくるとき、あるいは、平凡で自明だと思つた一句から、あざやかな観念がたちあがって、遠く飛翔してゆくととき、そういうとき、私は、強い啓示を受けてきているので、横すべりの要約などはなにもでもないのである。十のものを一にするのではなく、十のものを百にして与えることを、あるいは、生徒自身を百にするように指導することを、どうして、教師はもうすこし考えないのかと思う。もしくは、どうして、それを読解研究の重要課題としないのかと思う。大げさな言いかたをしたが、段階段階に応じて、それは可能はずである。

ただ、そういう拡充法が、テスト式思考法と齒車が合わぬことだけは、たしかである。第一、教師自身が、ひきのばしうるだけのゆ

たかなものを自分のなかに持つていなければ、どうにもならない。だが、公約数的理解を唯一至上とするテスト的思考法は、おそらく、そういう独自のものを封庄するようにはたらく。生徒のことは言わない。教師自身、もし、どんな教材にむかって、言いかえか要約よりほかすることがないと感じ、しかも、それをあやしまない状態になつていたら、テスト的思考法の毒が全身にまわっていることを自覚すべきである。